

山本秀順大和尚
平和熱情天下響
特高速捕入牢獄
獄中出獄徹主張

贈先住猊下

厚木市 荒井 一雄

政界や
財界無視し 反骨の
意志を徹せし大宗教育家
先住猊下に贈る
山本秀順 大和尚
平和の熱情天下に響けき…
特高(特別高等警察)・
(猊下を)逮捕し、
牢獄に入れけり…
されど、出獄後も、
平和の主義・主張(イデオ
ロギー)を徹しけり…

春立つ日高尾の峰に富士眺め
節分の翌日、二月四日が立春である。気温はまだ低いが、暦の上ではこの日から春になる。陰暦を用いる地方ではこの月に正月を祝う。また、今年も元旦以来、暖冬の日が続いたが、立春の日をもって三十日間の寒が明け、立春の高尾山の一望千里の見晴し台の山桜も艶めきて来、指呼の間に見る、屹立した真白な富士山は神々しい。やがて山桜の枝に乗る富士を見るのも楽しみである。
(高尾山健康登山の会々々)

折り折りの記(78)

波多野 重雄

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(44)

初夢に
古郷を見て
涙かな

(小林一茶「寛政句帖」)
この句は、江戸時代後期の俳人、小林一茶(一七六三〜一八二八)が俳諧修行の旅先で詠んだものです。三十二歳になったばかりの一茶の初夢には、どのような故郷信濃の光景が蘇ったのでしょうか。寒さの残る春先に一人流した、懐かしく温かな涙だったのかもしれない。
先月号で取り上げたように、初夢は古くは節分の夜(立春の朝)の夢でした。やがて大晦日や元旦へと移り、今では正月二日に見る夢と言われています。今年私も二日の夜には、「なかきよの」という「回文歌」(上から読んで下から読んで

も同じ音になる歌)を書いた和紙で「宝船」を折り枕の下に敷いて床に就きました。結果はいつも通りの臆気な目覚めでしたが、節分の夜に、もう一度試してみようと思っています。
節分の夜が明けると、いよいよ春の到来です。豆撒きの大声によって、寒さも追い払われたのでしょうか。いつしか柔らかな東風が、池の水面や木々の葉先を揺らしながら、春の訪れをそつと告げています。
年の始めを元旦とするなら、「立春」は季節の始まりです。夏も近づく「八十八夜」や秋の「二百十日」などは、立春の日から数え始めています。これから少しずつ草木も芽吹いて、さまざま自然の姿を私たちに見せて

くれるでしょう。
君ならで
誰にか見せむ梅の花
色をも香をも
知る人ぞ知る

(古今集「紀友則」)

(あなたでなくて、誰に見せたらいいのでしょうか。この梅の花の色も香りも美しさを分かってくれるのは、あなただけです)
梅は、松・竹とともに冬を堪え忍んだ友達(歳寒三友)と言われます。
「梅は花の兄、菊は花の弟」という言い回しがあるように、まだ春浅き中に、いち早く可憐な色香を現してくれるのです。
「風待草」や「句草」とも呼ばれる梅には、「好文木」という異名もあります。これは「文を好めば則ち梅開き、学を廃すれば則ち梅開かず」という中国の故事から名付けられたとか。思い起こせば、二十歳の頃に高尾山で二ヶ月ほどの冬籠もりをしました。修行も終わりに近づいた頃、いつものように諸堂を参拝し



梅は立春の頃に咲き、可憐な色香を現してくれる

ていると、奥の院不動堂の片隅に一輪の梅の花が咲き初めていました。日々お経を唱え続け、慣れない所作を繰り返して習っていた自分を見守ってくれていたのかと嬉しく感じたのでした。あの梅の花は、今年も優しく微笑んでいるでしょうか。
旧暦二月十五日は、お釈迦様が入滅(仏が亡くなること)なされた日です。この日高尾山では、入滅の場面を描いた「仏涅槃図」を拝しながら、お釈迦様の慈愛を思い慕う「釈尊涅槃会」が執り行われます。四月八日の「灌仏会」、十二月八日の「成道会」とともに三大法会の一つである「涅槃会」では、新たな春の息吹を感じつつ、お釈迦様の命の末期に思いを馳せます。
お釈迦様の入滅をめぐっては、日本において次のような話が伝わっています。
仏が八十歳になったとき、弟子の阿難に語りました。「私は今、体中が痛んでいる。あと三ヶ月

ほどで亡くなるだろう」と。阿難は仏に尋ねました。「仏様はすでに全ての病を遁れています。それなのにどうして、痛みに苦しまれているのですか」と。
すると仏は起き上がり、大いなる光を放って世界中を照らしました。光によって全ての人々の苦しみを取り除き、満ち足りた安楽を与えたのでした。さて、二月十五日の夜半のこと。辺りを見回すと拘尸那城近くの梅檀(白檀)の木は悉く枯れ果て、菩提樹の木の実は落ちきっていました。沙羅双樹を吹き抜ける風は寂しく、跋提河の波は凄まじく荒立っています。
仏が獅子のように右脇を下にして横たわると、弟子たちを始め、多くの生き物が集まり、草木までもが一心に悲しみの色を帯びました。いよいよ仏が入滅したとき、悲嘆の喚き声は三千世界に響き渡ったのでした。
(『今昔物語集』)

『宝物集』など)
お釈迦様は、命ある者には必ず死があり、始めがあれば終りがあり、会えば別れがあり、楽しみの中には悲哀があることを教えてくれました。仏でさえも免れなかった苦を、私たちは避けて通ることができないのです。
古の
別れの庭に
会へりとも
今日の涙ぞ
涙ならまし

書籍紹介

このたび、大正大学名誉教授、智山専修学院前院長である福田亮成先生が、平成十五年九月号から平成二十四年六月号に渡り、高尾山報に連載していただきました、『大日経住心品疏を読む―密教とは何か』を加筆編集して、出版されました。



弘法大師に聞くシリーズ 別巻②
現代語訳『大日経住心品疏』を読む
密教とは何か
福田亮成 著
(株)ノンブル社 14,000円(税別)